ブルゴーニュ赤ワインの販売、2026年9月までの1年間で4.1%減

ブルゴーニュ白ワインは0.8%増の1億1,700万本に。輸出と一部市場での値下げが販売を支えた

2026年11月22日（日）



DRAAF Bourgogne-Franche-ComtéとComité des vins de Bourgogneが11月に発表したデータによると、2026年9月までの12カ月間、ブルゴーニュのワイン市場は勢いを失い、赤ワインが明確な落ち込みを示す一方、白ワインは底堅く、スパークリングワインは伸びた。

データによると、この期間のブルゴーニュ赤ワインの販売は4.1%減少した。白ワインの販売は0.8%増え、約1億1,700万本に達した一方、Crémant de Bourgogneは7%を超える伸びを記録した。赤・白を合わせたスティルワインの販売は0.7%減だった。

この内訳はブルゴーニュ以外にも重要な意味を持つ。同地域は世界の高級ワイン市場で最も重要な

産地の一つだからだ。ブルゴーニュで赤、白、スパークリングの差が広がれば、輸出戦略や価格設定、商品訴求にも影響し、特に高級ワイン市場を中心に、飲料業界全体に波及する可能性がある。

赤ワインの販売減が注目されるのは、ブルゴーニュがこれまで、ワイン消費全体の減速から他の多くのフランス産地よりも影響を受けにくいと見られてきたためだ。供給が限られ、国際需要が強いことで知られる産地でさえ、赤ワインへの関心の低下に直面していることを、今回の数字は示している。元データによれば、減少はアペラシオンの複数の階層に及び、従来、コレクターや富裕層の消費者を引きつけてきたワインも含まれる。

この変化は、フランスで長年続く飲酒習慣の変化とも一致している。特に若年層で、赤ワインは年々存在感を失ってきた。市場の多くの地域では、軽やかなスタイルや白ワイン、スパークリングワインが、骨格のしっかりした赤ワインを上回る動きを見せている。ブルゴーニュの最新販売データからは、フランスで最も注目される産地の一つでも、こうした嗜好がより明確に表れていることがうかがえる。

ブルゴーニュの白ワインは比較的底堅かったものの、伸びは小幅で、注意すべき点もある。Comité des vins de Bourgogneによると、販売数量の増加は一部市場での値下げにも支えられた。つまり、ボトル本数がわずかに増えても、生産者の売上高が伸びたとは限らない。フランス国内ではブルゴーニュ白ワインの販売が実際には2.8%減少し、輸出が国内の低迷を補った。

報告書が引用するデータによると、白ワインの主なけん引役はChablis、Petit　Chablis、そしてMâconnaisの地域ワインだった。価格に対する買い手の慎重さが増しているとみられるなか、より手頃なブルゴーニュの白ワインのアペラシオンが、需要のより大きな割合を担っていることを示している。

Crémant de Bourgogneは、スティルワインのカテゴリーを引き続き上回る実績を示した。2026年9月までの12カ月間の販売は7%を超えて増え、スパークリングワイン全般の好調な流れをさらに伸ばした。この動向は生産者や流通業者にとって重要だ。Crémantは高級化と価格に見合う価値の両方にまたがる商品だからである。伝統方式のスパークリングワインを求めながら、シャンパーニュの価格は避けたい消費者から支持を得る可能性がある。

他の指標からは、市場が減速しているものの、急激に崩れているわけではないことがうかがえる。2026年9月末時点のスティルワイン在庫は、前年同期比で3%減少した。一方、AOPのバルクワイン取引は、2025年9月と比べて2026年9月に68%急減した。新たな販売シーズンの始まりに、生産者と業者の間の取引が極めて低調だったことを反映している。

供給も縮小している。DRAAFの初期推計では、2026年の収穫量は平年の基準値を約30%下回る見込みだ。8月のセラー出荷量は過去5年平均を31.1%下回った。生産量と供給可能量がともに減っていることから、販売が弱くても価格が自動的に下がるわけではない理由が分かる。

2026年9月末時点で、スティルワインの在庫は販売量の約15.3カ月分に相当した。特に、生産量の少なさによる制約をすでに受けているアペラシオンが多い地域では、在庫が潤沢であることを示す数字ではない。業者や輸入業者、レストランの仕入れ担当者にとっては、一部カテゴリーの需要が弱まっても、ブルゴーニュは高価格で、入手しにくい状態が続く可能性がある。

地域内でも価格の動きにはばらつきがあった。DRAAFによると、バルク市場ではMercureyの赤ワイ

ンが18％上昇し、Irancyは9％上昇した一方、Côte-d’Orの一部村名アペラシオンは逆の動きとなった。Gevreyのバルク価格は約15％下落し、Marsannayは約20％下落した。これらは小売店頭価格ではなく業者間取引価格だが、ブルゴーニュを一つの市場として扱えないことを示している。

アペラシオンごとの価格差は、需給バランスがより細分化していることを反映する。ブランド力、輸出への依存度、ヴィンテージの状況、各村の評価が、引き続き価格を左右している。業界にとっては、「ブルゴーニュの価格」という大まかな見方より、カテゴリーごとの分析が重要になっている。

輸出は引き続き重要な支えとなっている。DRAAFによると、2026年の最初の8カ月間に海外向け出荷が増え、複数の欧州諸国で好調な動きが見られた。ただし、ここでもカテゴリーによって実績は異なる。白ワインとCrémantは赤ワインより底堅く、国際需要が現在、地域市場の安定化にどれほど寄与しているかを浮き彫りにした。

フランス国内の消費が弱まっても、小売店で大幅な値引きが起きていない理由の一つは、輸出への依存度の高さにある。生産者やネゴシアンは、需要や価格環境が大きく異なる市場間で販売量を振り分けられる。ブルゴーニュのように国際市場への依存度が高い地域では、国内の不振が直ちに小売価格の引き下げにつながるとは限らない。

ブルゴーニュの生産構成は、同地域に一定の防御力を与えている。報告書が引用する数字によると、白ワインは地域全体の生産量の約61％を占める。白ワインとスパークリングワインが赤ワインより底堅さを示す現在、これは強みとなる。それでも最新データは、ブルゴーニュもワイン業界全体を揺るがす圧力と無縁ではないことを示している。消費者の嗜好の変化、国内消費の低迷、収穫量の縮小、そしてカテゴリーやアペラシオンごとに広がる価格のばらつきがその要因だ。